田村のつぶやき　第 10 号

2023.9.25 発行

文責：島根県立江津高等学校長　田村康雄

自分を創る

「自分を創る」作業の典型を、以前は修行といった。比叡山の千日行というのがある。叡山の山中を千日、ただひたすら走り回る。それを終えると、大阿闍梨（だいあじゃり）という称号がもらえる。マラソンの選手じゃないんだから、お坊さんが山を走り回ったところで、一文にもならない。だれに頼まれたわけでもないし、そんなことをしても、なんの意味もない。ＧＤＰも増えない。じゃあ、なんでそんなことするのか。走り回った挙句果てに、本人が変わる。つまり修行のあとに出来上がる唯一の作品が、大阿闍梨本人である。修行を無益だと思う人は、そこを忘れている。芸術家なら作品ができるし、大工なら家が建ち、農民なら米がとれる。しかし坊さんはそのどれでもない。それならなにをするのかといえば、「自分を創る」のである。

叡山を走り回ったら、自分ができるのか。そんなことは知らない。しかし伝統的にそうするのだから、できるのであろう。少なくとも、ふつうのお坊さんではなくなるはずである。それだけのことだが、人生とは「それだけのこと」に満ちている。私は三十年、解剖をやった。それだけのことである。そのあと十年、本を書いた。それだけのことである。自分とは「創る」ものであって、「探す」ものではない。それが大した作品にならなくたって、それはそれで仕方がない。そもそも大したものかどうか、そんなこと、神様にしかわかるはずがない。それがわかったら、もう個性とか、本当の自分とか、自分に合った仕事とか、アホなことは考えないほうがいい。どんな作品になるか、わかりゃしないのだが、ともかくできそうな自分を「創ってみる」しかない。

出典：養老孟司『無思想の発見』（ちくま新書）より転載

養老さんは、**自分とは「探す」ものではなく、「創る」ものだ**と言っています。「自分探し」というと、どこかに完成された理想的な自分像があって、そこへ何とかしてたどりつくというイメージですが、そんな理想の自分がどこかに用意されているわけではありません。それは自分自身で「創る」しかないのです。前号のワードで言えば、それこそが**「Being（あり方）」**です。

高校卒業後の進路選択も、自分を「創る」ための大きなステップです。自分自身の未来を、どんなふうに創り上げていくのか。自分自身の人生を、どのように歩んで行きたいのか。そこをきちんと考えていくことです。その答えは、今すぐにはわからないかもしれません。５年先、10 年先の自分と言われても、正直なところピンとこないかもしれません。それがあたりまえ。ひょっとしたら一生その答えはわからないかもしれません。そんなことは意味が無いと感じるかもしれません。でも「自分自身がどういうふうに生きていきたいか」という自問自答をしなくてはいけないのです。

だって、あなたの人生は誰も代わってはくれないのだから…。